



南山大学人類学博物館 MUSEUM notes

- ・日本の絵銭—絵銭に表された動物
- ・タイ ユーミン族の「評皇券牒」

VOL.6 2022.2

日本の絵銭

—絵銭に表された動物

今回は貨幣コレクションの中から、動物が表現されている日本の絵銭を紹介します。

通常、多くの絵銭には縁起物の福神、家紋や故事にちなんだ絵柄が表現されています。その中には縁起が良いとされた動物、また広く親しまれてきた動物の姿も見られます。

【海老】(五位堂銭)



径 28.05mm
厚み 2.49mm
重さ約 9g

五位堂銭(ごいどうせん)の海老丸背大福(えびまるはいだいいく)です。この絵銭は、一匹の海老が描かれている面を表として見て、裏面には大福と書かれています。

五位堂銭は他の絵銭と違い、

石けり遊びの玉として奈良県北葛城郡五位堂村(現在の奈良県香芝市五位堂)で製造されたものです。材質は鉄であることが多く、重みがあるのが五位堂銭の特徴です。他種類の絵銭と比べると新しい種類のもので、江戸末期から明治中期以降頃まで作られていたようです。

【狐】(稻荷銭)



径 24.23mm
厚み 1.27mm
重さ約 4g



径 24.88mm
厚み 2.24mm
重さ約 7g

狐が描かれた絵銭は稻荷銭

と呼ばれています。これらの絵銭は向かい合う狐と、その下に鍵、上には玉(宝珠)が描かれています。鍵玉稻荷(かぎたまいなり)、玉鍵稻荷(たまかぎいなり)、大鍵稻荷(おおかぎいなり)など複数の名称があります。

七福神と同様に、五穀豊穡や商売繁盛を願ったものです。狐は稻荷大明神の眷属(けんぞく)として様々な構図で描かれています。稻荷銭は現存する数も多く、稻荷神の信仰が盛んだったことが分かります。

【兎】(十二支銭)



径 22.01mm
厚み 1.53mm
重さ約 4g

十二支に登場する動物が描かれる十二支銭で、この絵銭には兎が描かれています。十二支の動物たちが一面に大きく描かれているのが特徴です。

【猿】(南部庚申銭)



径 27.86mm
厚み 1.36mm
重さ約 5g

この絵銭は南部庚申銭(なんぶこうしんせん)や三猿銭と呼ばれるもので、「見ざる言わざる聞かざる」を表しています。

幕末から明治初年にかけて主に東北地方(盛岡藩)を中心に盛んに製作された絵銭は、南部方面絵銭と分類されます。盛岡藩の藩主が南部氏で、南部藩とも呼ばれていたことが由来です。

【馬】(駒曳銭など)



径 25.91mm
厚み 1.34mm
重さ約 4g

この絵銭は表面に開運神寶と書かれ、背面に神馬が描かれているため開運神寶背神馬(かいうんしんぼうはいしんめ)と呼ばれます。

絵銭には馬の絵柄を取り入れたものが多くあります。神事に馬を捧げる風習が浸透し、生きている馬の代わりに絵を奉納することも多くなりました。この流れから、絵銭の絵柄に取り入れられていったのではないかと考えられています。

また、特に人や猿が馬を曳いている場面が描かれている絵銭は駒曳銭と呼ばれます。駒曳銭にはたくさん種類があり、どのような絵柄かによって更に詳細な分類があります。

・二俵駒曳(にひょうこまびき)



径 25.45mm
厚み 2.84mm
重さ約 9g



径 20.43mm
厚み 1.78mm
重さ約 6g

・猿駒曳(さるこまびき)



径 25.83mm
厚み 1.36mm
重さ約 4g



径 25.61mm
厚み 1.61mm
重さ約 4g

・南部桃猿駒(なんぶももざるこま)



径 34.49mm
厚み 1.97mm
重さ 12g

【牛】(駒曳銭)



径 25.25mm
厚み 1.65mm
重さ約 5g

駒曳銭に分類される絵銭の中でも、この絵銭は馬ではなく牛を曳いているのが特徴で、吉田牛曳(よしだうしびき)と呼ばれています。寛永十三(一六三六)年に寛永通宝を鑄造する錢座が三河吉田藩(愛知県豊橋市)に置かれ、寛永十七(一六四〇)年まで製造されました。寛永通宝が十分に流通するよ

うになったため寛永通宝の製造は終わり、この吉田牛曳が作られるようになりました。

(南山大学人類学博物館)

学芸員 秦 優莉香)

【参考文献】

赤坂一郎編 二〇〇六

『日本の絵銭』書信館出版株式会社

寛永通宝と吉田駒曳銭(吉田牛曳銭)

(strayamahmezinyva-

yosidatenmanguu.com)

タイユーミン族の「評皇券牒」

museum notes VOL.5に引き続き、タイのユーミン族の資料から、「評皇券牒(ひょうこうけんちょう)」をご紹介します。前号ではユーミン族やこれらの資料の収集の経緯について紹介しました。今号では評皇券牒の中身を紹介します。

「評皇券牒」はミン語で過山榜(Kia sen poang)と呼ばれる、中国の皇帝から与えられた特許状です。ユーミン族の出自

に関する起源神話や、これを背景にした焼畑農業と移住生活の許可、租税免除の特権などが漢字で記されています。しかし、実際に中国の皇帝から発布される勅書のスタイルとは異なること、架空の事柄が書かれていることから、中国皇帝から与えられたものではなく、ユーミン族によって書き足されたものだと考えられます。

人類学博物館が所有している評皇券牒は、上智大学西北タイ歴史文化調査団が一九七四年に行った第三次調査の際に、現地で購入したものです。

竹紙(ちくし・竹の繊維を漉いて作られた紙)を幾枚が継ぎ足して長尺にしてあり、長さはおもにも及びます。その継ぎ目には直径12cmほどの朱印が押されています。

ではその中身を見ていきましょう。

巻頭には「評皇券牒過山防身永遠」とあり、「山地を移住

するユーミン族を評皇券牒が長きにわたって保障する」と記述されています。

本文冒頭の「正忠景定元年」とは、一二六〇年の南宋の皇帝・理宗の治世をさします。

ユーミン族の起源神話に該当する前半部分には、「昔、盤護(ばんこ)という霊力をもった犬があり、皇帝のために敵軍を討つという功績をあげた。皇帝はその褒美として、盤護に自分の娘との結婚を許した。数年後、夫婦の間には六男六女の十二人の子供が生まれた。十二人の子供たちはそれぞれ姓を与えられ、長男には父盤護から受け継がれた「盤」という姓が、他の十一人のきょうだいには沈・黄・李・鄧・周・趙・胡・唐・馮・雷・蔣の姓が与えられた。勅令により、子供たちは、それぞれ妻・婿をもらい、十二姓は脈々と受け継がれていった。」という内容が書かれています。

中盤には「評皇券牒發天下



図1 評皇券牒 冒頭部分

